Osaka University Knowledge Archive

Title	あの日から１０年、野田村の想い ： 改めて考える岩手野田村でのフィールドワーク
Author(s)	石塚, 裕子; 渥美, 公秀
Citation	未来共創. 2021, 8, p. 275-291
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83906
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

あの日から10年、野田村の想い
改めて考える岩手野田村でのフィールドワーク

石塚 裕子
大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター特任講師
渥美 公秀
大阪大学大学院人間科学研究科教授

1．コロナ禍でコミュニティ・ラーニングを実施して

コミュニティ・ラーニングは、2013年度からリーディング大学院未来共生イノベーター博士課程プログラムの必修授業としてはじまり今年で8回目となった。今年度は、大阪大学大学院人間科学研究科学修証明プログラムとして、また選択科目として14人の学生が受講した。

受講生の多くは東日本大震災が起きた時は中学生であり、テレビで見た記憶はあるという程度の遠い所の昔の出来事となっている。本授業をきっかけに東北の地を実際に訪れて、東日本大震災について学び、災害とは何か、復興とは何かを肌で感じて考えてみたいという強い思いを受講生はもっていた。しかし、2020年1月頃から急速に広まった新型コロナウィルス感染症は、その思いを阻むこととなった。

5月末に緊急事態宣言が解除され、大学の活動も徐々に緩和されていく中で、現地でフィールドワークを実施しようと間際まで検討を重ねた。しかし、現地では集団生活が必須となること、その時点では岩手県に感染者がでていなかったこと、そして野田村は高齢者が多く感染によるリスクが高いことなどを考慮すると断念せざるを得なかった。結果として、オンラインでの講義とインタビューによる「オンラインフィールドワーク」という形式をとることになった。また希望者には短期間（2泊3日）、分散して（2、3人）野田村を訪問する機会（た

石塚 裕子；y-ishizuka@hus.osaka-u.ac.jp

だし、村民との接触は避けることが条件）を提供し、3名の受講生が2回にわけて野田村を訪問することとなった。

今年度は東日本大震災から10年を迎える節目の年でもあった。このためフィールドワークのテーマを「あの日から10年、野田村の想い」と設定し、震災・津波から10年を目前として、今だから言える話、現在を語る話、未来に向けた話を聞かせていただくことを目標とした。

オンラインフィールドワークでは、2つの講義と7名の村民のインタビューが実現した。過去7年間の報告書の中から受講生が気になった（今、話を聞いてみたい）人を選んだ。14人の学生は4班（子どもの教育、観光・交流、村のコミュニティ・伝統、外部者との連携・村の誇り）に分かれてインタビューを実施した。また、事前に野田村の産品を取り寄せ、少しでも野田村をリアルに感じられるような工夫も行った。村民一人ひとりの語りは、心に迫る見事なものであった。受講生全員を「野田村に行ってみたい」とより強く思わせることとなった。

2．オンラインフィールドワークの手応えと現地に赴くことの意味

今年はオンラインであっても、あるいは、オンラインであったからこそかえって、フィールドワークについて、さまざまな学びがあり、思いが芽生えたようだ。以下に受講生一人ひとりの感想を紹介する。

（1）自分の経験と重ねて涙を流した

現地で海辺を歩いてみたり野田村の人々に出会って話してみたりすることができないのは非常に残念であった。一方、オンライン上での講義やインタビューを通してではあったが、野田村に関して知ることができ、また、野田村の方々の気持ちや真の心が伝わってきて、感動を覚えた。コミュニティ・ラーニングの最後の日、先生方や先輩方に対して感謝の気持ちが溢れてきた。今まで長い間、野田村の方々と先生方や先輩方が信頼関係を築いてきたおかげで、突然のオンラインフィールドワークとはなったが、うまく行うことができたと思われた。今回の経験を通して、人間関係が築けていれば、オンラインフィールドワークも実施可能であることを実感した。

何度か感動を覚える場面があった。地震の被害によって家を失ったおじいさんが子どもたちの運動会を見て「久しぶりに笑った」と言っていたという小林

表 1　コミュニティ・ラーニング 2021 の内容

		内容	聴講者・インタビュアー
22 日（土）	10:00 ～	オリエンテーション	
	10:30 ～	講義 1：野田村の魅力紹介 貫牛利一氏（久慈広域観光協議会）	全員
	12:00 ～	昼食休憩（1h）	
	13:00 ～	講義 2：野田村の震災と復興 小野寺修一氏（野田村役場）	全員
	14:30 ～	小谷地勝氏（漁師）インタビュー	村のコミュニティ・伝統班
	15:45 ～	外舘尚紀氏（中学校 PTA 会長・漁師） インタビュー	子どもの教育班
	17:00 ～	１日のふりかえり	
	17:30	終了	
23 日（日）	10:00 ～	佐々木陵太氏（株式会社のだむら） インタビュー	観光・交流班
	11:30 ～	弐又みち氏（ソーシャルワーカー） インタビュー	村のコミュニティ・伝統班
	13:00 ～	平谷東英氏（養豚事業者・野田村観光協会会長）インタビュー	観光・交流班 外部者との連携・村の誇り班
	15:00 ～	小林友美氏（小学校支援員） インタビュー	子どもの教育班
	16:30 ～	１日のふりかえり	
	17:00	終了	
24 日（月）	10:00 ～	大沢幸正氏（園芸事業者） インタビュー	外部者との連携・村の誇り班
	11:30 ～	3 日間のふりかえり	
	13:00	終了	

友美さんの話を聞いて涙を流してしまった。韓国で経済危機（IMF）が起きた時に、家を失いかけた経験があった私には、その悲しさが心に伝わってきた。災害やある出来事によって、命を失ったり、大きな怪我をしたり、家を失ったりする経験をした人たちはそれをどのように乗り越えていくのだろう。野田村では、災害からの復興に向けて活動する中で、来年で10年という時間が経ち、ハード事業はほぼ完了しているが、心のケアへの課題は残っているようだ。心の復

写真１：オンライン講義の様子

写真２　オンラインインタビューの画面

興のために、被害の当事者が自らできることは何か、コミュニティやボランティアなどの周りの人たちができることは何か。今回の講義やインタビューを通して、野田村の人々の生きる力を強く感じることができたが、一方で、心のケアの必要性と具体的な支援方法が求められると思った。そして、外舘尚樹さんのインタビューでは、飾りのない率直さと人情の厚さを感じた。外舘さんのイン

タビューが終わってからは、野田村に行ってみたいという気持ちがより強くなった。海も見てみたい、ホタテも食べてみたい、野田村の人々に会ってみたくなった。これから現地訪問の機会があれば、行ってみたいと思っている。オンラインフィールドワークを通して出会った野田村の方々に直接会ってみたいし、野田村の自然と文化、歴史を自分の目で見て、体と心で感じてみたい。
（言語文化研究科　日本語・日本文化専攻　李秀珍　いすじん）

(2) 自然体で録画できるオンラインインタビュー

オンラインではあったが、保護者としての立場から外舘尚紀さん、小学校支援員としての立場から小林友美さんのお二人にインタビューをすることができ、野田村の子育てや教育の一端を知ることができたことは、たいへん意義深いと思う。お二人は立場こそ違うが「この地域で生きていきたい」と思えることこそが、「次世代の地域を担う人材確保につながる」という共通の認識をもっていらっしゃった。

今回の体験から、対面でできないと嘆くだけでなく、オンラインでも聞き取りができ、このような状況でも距離や空間を飛び越えて様々な人にインタビューができる可能性が広がったとみることができよう。また、今回のインタビューで特にプラス面であったのは、ビデオ撮影が自然と行われたことでもある。今までの経験上、ビデオカメラをセットして、インタビュイーにカメラを向けて話していただいたことが何度かあり、自分も反対にビデオカメラにおさめられる体験をしたことがある。その緊張感や微妙な空気感は、それぞれの距離が近く、また人数が複数であることで、ふだんの姿からどんどん遠のき、本来の思いや言葉を語ってもらうことや発することが、難しいと感じたことがあった。

しかし、オンラインでは録画を意識することもなく、お互いが安全な形態での対話をし、そのビデオを見直すことで、リアルタイムでは気付かなかった外舘さんや小林さんの表情、声の大きさ、想いの深さにもう一度出会い直すことができ、再考することができた。

今回の聞き取りから見えてきた震災教育や地域学習に代表される野田村の教育的取り組みは、震災直後から現在まで少しずつ形を変えながら継承され、子どもたちの中に郷土愛や防災の意識を根付かせている。その教育の中心となっているのが学校であり、震災後から現在に至るまで地域の人々をつなぎ、重要

な役割を果たしている。そして、子どもたちが地域の未来を支える一員として活躍するために、子どもと地域の産業をつなぐ役割を果たすことの重要性が、お二人の語りから浮かび上がってきた。たった1時間のオンラインインタビューではあったが、その1時間はたいへん有意義な時間であった。

そして今回の貴重な体験から、私はコロナ禍が終息したら、様々な魅力をもち、復興に取り組む野田村をぜひ訪れてみたいと強く感じた。

（人間科学研究科　教育文化学　桶河優子　おけがわゆうこ）

(3) これまでの関係性の大切さを感じた

私は調査としてインタビューを行うことがほとんど初めてだったこともあり、ましてオンラインで初めて会う人へインタビューを行うなんて「本当にできるのだろうか？」と不安な気持ちでいっぱいだった。しかしながら、野田村の方々はオンラインでも私たちのことを温かく受け入れて下さり、思っていた以上にたくさんのお話を聞くことができた。これは、野田村の方々のご協力はもちろん、これまでこの授業を受けてきた先輩方や先生方が、野田村と築いてきた関係性があったからこそできたことだと思う。以前にこの授業を通して学生からインタビューを受けたことのある方は特に、こちらの意図を理解して回答を準備して下さっていたことなどからも、これまでの関係性の大切さを感じた。また、先輩方が積み上げてきた報告書も、最初にインタビューを行う上でどのような問いを中心に伺うかなどを考えるときに非常に参考になった。一方で、このようなこれまでの積み重ねがなかったならば、オンラインでのインタビューはとても難しいものになっていたのではないかと思う。ビデオの機能によって、話をしている時の相手の表情や動きを目にすることはできたとしても、相手が住む街の様子や背景などはなかなか感じ取ることが難しい。60分1回のビデオ通話で伺えること、感じ取れることは、やはり限られていると感じた。もちろん、今回のインタビューで野田村のことを以前よりもずっと多く知ることはできたと思うが、新型コロナウイルスの流行が落ち着いたらぜひ野田村に足を運んでみたいと思う。また、野田村での今後の課題に「心の復興」が挙げられていたが、外部の人である私たちができることとして、今回限りの関係ではなく、少しずつでも野田村との関係性をもち続けることが大事であると思った。せっかくこの授業を通して野田村を少しだけ知ることができたのだから、これからも野田村に行ったり、野田村の美味しい食べ物をいただいたりして野田村との関係を

もち続けていけたらいいなと思う。
（人間科学研究科　教育制度学　中丸和　なかまるなごみ）

(4) オンラインの課題を克服するためには調査者側に努力が必要

今回のオンラインフィールドのワークを通した率直な感想は、「思ったよりできた」というものである。なぜならば、実施前はそもそも「オンラインフィールドワーク」という言葉自体が一種の矛盾を孕むものであり、本当にインタビューが成立するのかといった不安を抱いていたからである。しかし、その不安とは裏腹にインタビュイーの方々は、初対面であることに加え画面越しにも関わらず、私たちの質問一つ一つに真摯に向き合い回答して下さった。この成功要因を考察すると、これまでに先生方や先輩方が築いて下さった野田村の方々との信頼関係が大きな要因であることに気付かされる。インタビューを引き受けて下さった方の多くが本授業並びにフィールドワークに理解を示していただいており、ある程度こちらの意図を汲んでいただいているからである。この点に関しては、オンラインフィールドワークの可能性と呼べるものであろう。つまり、事前に関係性が構築されている対象者であれば、オンラインフィールドワークを通して得ることのできるデータはある程度信頼できるものであると言える。

一方で、オンラインフィールドワークの課題も浮き彫りになった。それは、得ることのできる情報が非常に限られている点である。今回はZoomというツールを用いたが、そこから得られる情報としては、相手の声と表情のみである。これはインタビュー調査の情報としては十分であるかもしれない。しかし、フィールドワークとは本来、対象者の背景や周囲の人間関係、生活環境など、五感を使って相手のことを知るものである。また、インタビューの際は、その前後の何気ない会話から様々な情報を得ることができ、ときにそれが非常に重要な意味をもつ場合がある。今回はこのようなフィールドワークや対面インタビューの醍醐味とも言える部分の情報収集に限界があった。この点に関しては、オンラインフィールドワークの課題であると言える。

そのため、今後のオンラインフィールドワークにおいては、これらの課題を克服していくための調査者側の努力が求められると考える。例えば、事前交流の機会の創出である。前半に述べたオンラインフィールドワークの可能性においても、対象者との関係性の重要性が考察された。このように、フィールドワー

クという形ではなく、お互いの為人(ひととなり)を知る機会を創出することができれば、事前にある程度の関係性を築くことができ、それらから得た情報の精度を高めることができる。
（人間科学研究科　国際協力学　小松勇輝　こまつゆうき）

(5) 想像と現実の距離を近づける

一度も訪れたことのない場所に向かうとき、人は不安と期待に胸を膨らませる。日々の生活からの解放を味わえる非日常的な空間に冒険心が煽られると同時に、慣れない場でのアクシデントに対応出来るかという心配を拭いきれない。そのために情報を集め、その場所に対してあらゆる想像を働かせるのである。想像で頭をいっぱいにして、その場に向かうのだが、想像通りではあっても、全く一緒であったことなどあろうか。

詳細で正確な情報を大量に収集して得たものと、実際に自身の目で見て触れて感じたもの、そこには必ず違いがある。後者により価値を見出しているのが、なにより「フィールドワーク」なのだ。フィールドワークとは、実際に現場に赴き、そこで暮らす人々が見ているものを、五感を通じて体感することで、その人たちの生きる社会、その社会に対する意味づけを理解することに価値が見出される。それをせずに（新型コロナウイルス流行下のためしょうがないことなのだが）、一体野田村の何を理解出来たと言えるだろうか、それがオンラインフィールドワークを終えて、一番に感じた疑問である。写真で見る野田村と自身の目で見る野田村、画面越しのインタビューで掴む情報と実際に同じ空間で言葉を交わしながら聞くことの出来る情報、それぞれにおいて、どちらが物事の本質に迫っているかは明らかである。その土地がもつ歴史や伝統、自然や空気感を、身をもって体験した上で書かれる報告書こそがよりリアルなものとして認められるはずだ。

ただ、現場に行かないことに対して全否定の立場をとるのかといえばそうではない。私たちは、現地に行けないという不利を補うため、過去に野田村に行った先輩方が書いた報告書、ホームページ等で公開されている情報を必死に掻き集め、オンラインでのインタビューにおいては、事前にインタビュイーの把握やインタビュー項目の確認を怠らなかった。また、インタビュイーの人となりも知らないため、失礼なことを言わないように慎重に言葉を選んだ記憶がある。現場に行っていたとしても、前もって同じことはしていたであろうが、その準

備にかける熱量とそこから生まれる想像力の大きさは違っていたはずだ。たしかに想像と現実は異なる。しかし、現場に行けない状況下で、客観的な情報を整理して理解し、相手と同じ目線に立とうという、寄り添いともいえるあたたかい営みが行われたとき、想像と現実の距離は近づけられるのではないだろうか。

（人間科学研究科　未来共生学　藤内千浩　ふじうちちひろ）

(6) 難しいインタビューであった

インタビューをオンラインフィールドワークで実施することについては、関西から東北までの非常に遠い距離を一気に縮めることができ、とても便利な手段だと思う。しかし、やはり初対面の人にオンラインでインタビューするのは、若干気まずくなってしまうし、心の距離はあまり縮まらないと思った。それに加えて、現地に行ったことがなく、フィールドワークの経験もない私にとっては、事前調査の際に、「なんでこうしないのか、ああいう風にしたらいいじゃん」といった考えが止まらなかった。しかし、自分の考えをそのまま質問として出すのは気まずいと感じ、どのような質問をしたらいいのか、自分の考えをどのくらい相手に伝えていいのかなど、いろいろと迷う部分があった。インタビュー後の振り返りの際には、「これはもっと深く質問したほうが良かった」という自分の力不足と、貴重なチャンスを逃したことへの後悔を感じた。

したがって、今回のオンラインによるフィールドワークは、コロナ禍での良い解決策だとは思うが、私にとっては難しいインタビューとなった。特に、質問の技術やインタビューの進行などは、現地に行く場合より大きな課題になると感じた。

（法学研究科　法学・政治学先行　鹿沁雨　るーちんゆ）

(7) 現地に行くこともなく報告書を書くことが残念

まず自分の研究者としての力量不足を痛感した。私は学部生の時に、授業の課題として観光地を訪れた外国人観光客にインタビューをしたことがある。しかし、調査と呼べるような立派なものではなく、準備もそこそこにしかしていないようものであったので、今回のオンラインフィールドワークが私にとって事実上、初のフィールドワーク調査だった。事前に班のメンバーと自分たちが何を知りたいのか、その情報を得るためにはどういった質問をするべきかとい

うことを議論をし、どのようにインタビューを進めていくかなども話し合って準備を整えたつもりだった。しかし、実際に行なってみると、回答者が答えにくい抽象的な、または焦点を絞りきれていない質問が多く、回答者が答えに困っている様子が多々見られた。また、質問をすること、考えること、情報を得ることに必死になってしまい、相手のことをきちんと考えながらインタビューを進めることができていなかったのではないかと、あとから反省した。これらは準備不足というのもあるし、自分の経験が浅いことも大きな原因だと思う。ただ、できなかったことを反省するだけでなく、むしろ修士1年の夏という段階でこのような経験をできたとプラスに捉えて、これからの自分の研究に活かしていきたい。

今回のフィールドワークでは、インタビューに応じてくれた人たちの想いをオンラインでありながらも強く感じることができた。家や職場が流され、家族を失った人もいるだろう。それでもこの10年間、村の発展のために尽力し続けてこられた。そして今も、村の発展のために何かできることはないかと考え続けている村の人々を、素直に尊敬する。初日に講義をして下さった貫牛利一さんと小野寺修一さん、私たちの班がインタビューを行った平谷東英さんと大沢幸正さん、どの方も初対面の私たち学生に、それもオンラインという不慣れな環境であったにも関わらず、自分たちの考えや想いを伝えようと真剣にお話をして下さった。そのことに対してとても感謝しているし、だからこそ、現地に行くことなく報告書を書くことを残念に思う。このコミュニティ・ラーニングの授業では、先生方はもちろん、野田村の方たちにも大変お世話になった。今回は現地訪問を諦めることになってしまったが、もし機会があればぜひ野田村を訪問し、実際に村の人々と対話をしたいと思う。

（人間科学研究科　国際協力学　太田朱里　おおたしゅり）

(8) 拙速に答えを聞こうとするその姿勢を反省

最も印象に残ったのは、平谷東英さんが率直におっしゃっていた「震災後10年どう変わりましたか？とよく聞かれる、でも、そんなこと簡単に答えられない。」という言葉だった。震災で命を失われた方もいらっしゃれば、家や仕事を失われた方など、「被害」と一言でいってもそこには一人ひとり様々な状況がある。そのことから、とかく私たち外から入らせていただく者は簡単に「答え」を求めようとしてしまうが、震災の甚大な被害、そこからの10年という長い年月、

そこにはあたりまえのように一言では語りつくせないストーリーがあり、自分自身の拙速に答えを聞こうとするその姿勢そのものを反省させられた。

ただ、そのような中でもお二人とも笑顔で誠実にインタビューにお答えいただいたことには感謝しかない。「コロナがおさまればぜひ野田村に来てほしい」とおっしゃっていたように、この状況が収束すればぜひ家族で行ってみたいと思う。

（人間科学研究科　未来共生学　岡本工介　おかもとこうすけ）

(9) インタビューとは言葉の交流だけではない

一度も行ったことがない場所であるにも関わらず、話し伺うなかで、野田村が目の前に現れるように感じたことに驚いた。先生方や先輩方のおかげで、信頼感に満ちたインタビューを行うことができた。深く感じたのは、人とのつながりは空間の距離を乗り越えることができるということだ。本当に感謝している。

最も印象に残っているのは、野田村の人々の強い生きる力である。地震と津波で家を失い、仕事を失い、さらに家族を失ってしまう可能性もあった。それにもかかわらず、野田村の方々は、ポジティブな態度でそれらの苦難を受け止め、新しい生活を始められるように頑張ってきた。平谷東英さんが仰っていたように、今まで何もしていない人はおらず、それぞれが自分の責任感をしっかりともって、自分の目標に向けて一生懸命に頑張ってきたのだと思った。そのような強い意志を尊敬している。

また、もう一つ感じたのは、個人の運命と村の運命との強い繋がりである。平谷さんや大沢幸正さんは、村のことを話している時も自分の人生を語られており、逆に、自分のことを話している時も村の発展を語られている。そのような印象を強く受けた。それは、まさに集合体の意義だと思う。私たちはすでに個人化の物語に慣れてしまっているかもしれないが、実は村という集合体は、依然として影響力をもっているのではないかと考え始めた。

今回の経験からわかったのは、フィールドワークやインタビューとは、言葉の交流だけではないということである。一人の研究者あるいはジャーナリストとして、私はインタビュイーの生活を送る環境ともコミュニケーションをしていると思う。また、相手の言葉だけではなく、相手の表情、動作、そして私との相互作用などにも留意すべきだと考えられる。

また、相手と対話することは、自分の世界観を振り返って見ることにも繋がるだろう。一見すると、平谷さんや大沢さんに質問しているにもかかわらず、実は自分の人生を問うているのではないかと考えられる。つまり、フィールドワークは、実験やデータ分析とは違って、研究者の意志や世界観などを取り除くことができない。そういったことを改めて意識した。

現地訪問することの意味とはなんだろうか。情報を得るため、人間とのコミュニケーションだけではなく、街、建物、食べ物などとのコミュニケーションが重要であるから、現地訪問が重要視されていると考えられる。しかしながら、今回わかったのは、逆に、オンラインでインタビューをすることで、人とのつながりを改めて深く意識することができるということである。距離があるからこそ、繋がりの強さが感じられるだろう。

（人間科学研究科　コミュニケーション社会学　ZHANG XIAOBING　ちょうしょうびん）

(10)オンラインは調査手段として使えるが現場訪問に置き換えることはできない

インタビューで最も印象に残ったのは、異なる年齢層の人たちの故郷に対する感情と故郷の未来に対する期待である。また、野田村の人々の活力も感じた。野田村では、震災後に全員が迅速に救援活動に参加し、野田村を一歩一歩良い場所にするために外部のボランティアと積極的にコミュニケーションを図った。また、誰もが自分のことを考えるだけでなく、常に野田村の発展を気にかけている。野田村については写真と動画でしか知らないが、お二方からのお話を聞き、野田村の魅力を感じることができた。山と海が共存する自然の景観、歴史のある鉱山、そして温かくフレンドリーな野田村の人々などさまざまである。このようなことから、この小さな村も確かに地域過疎化の問題に直面こそしているが、活気のある場所に違いないと思った。

インタビューの時間は短いものであったが、非常に貴重な経験であった。現地に行けないからこそ、現地訪問の意味も感じた。オンライン調査は非常に便利で、時間と空間の制約がほとんどないと考えられるが、オンライン調査は想像しているよりも簡単なものではないことがわかった。例えば、リモートサイトの保証、アンケートやインタビューを受け入れてくれる人を探すことなどが難しいだろう。今回のオンラインインタビューがスムーズに実施できた理由は、過去10年間の先生方と先輩方の努力があったからである。長年努力を重ね、

相互に信頼しあう関係があったことで、インタビューを受け入れてくれた人も、サポートをしてくれた人も保証することができた。上記の課題以外にも、実際に現地に行っていないため、後で内容を確認し、まだ質問すべきことや完全に理解していないことがあったとしても、補足する方法がないということが課題として挙げられると思う。やはり現地訪問をすることで、調査および研究対象をより深く理解し、より良い研究を行うことができるだろうと考えている。前述のことから、フィールドワークにおいてはオンライン調査を手段として使い始めても良いが、それでも現場訪問に置き換えることはできないといえる。機会があったら、ぜひ野田村に行って、地域の自然や文化、風習などを体験したい。（人間科学研究科　国際協力学　ZENG LIRU　そうりじょ）

（11）現地を訪問して、同じ視点、同じフィールドに立てたと感じた

私は、3日間のオンラインフィールドワークと3日間の現地訪問を通して、現地に行くことができた喜びと野田村の皆さんに会えない寂しさの両方を経験した。

オンラインでのインタビューを振り返ると、やはり「難しかった」という感想が一番に浮かぶ。精一杯やっていたつもりだったが、あとで映像を見返してみると、きちんと聞き取れていなかった言葉や、汲み取れていなかった想いがいくつもあったことに気付いた。相手が目の前にいれば、わからない言葉をすぐに聞き返したり、相手の微妙な表情や言葉のニュアンスを感じ取ったりできたのかもしれないが、オンラインのインタビューではそれが難しかった。

また、決められたスケジュールの中で行うインタビューは、始まりはとても慌ただしく、終わりはとてもあっさりとしていた。限られた時間の中でなるべくたくさんの話を聞かなければと考えてしまい、自己紹介など時間をかけてお互いへの理解を深められないまま、すぐに質問を投げかけてしまった。そして、私たちの班のインタビューが終われば、またすぐ次の班のインタビューが始まってしまうため、時間が来たら席を離れなければならなかった。それがすごく寂しかったし、一方的に聞きたいことを聞いて終わるようで、とても申し訳なく感じた。一方で、先生方はZoomを介して顔を見ているだけで、インタビュイーの方々がどのようなことを考えているのか、何を言わんとしているのかが何となく分かると仰っていた。先生方のように、相手の普段の様子も何となく分かっていて、同じ景色を思い浮かべながら話ができるという関係性がある場

合は、オンラインでのインタビューも充実したものになるのかもしれない。しかし、我々には、それがとても難しいことであった。

野田村を訪れる前と後で大きく変わったのは、野田村の方々が見ている景色や日々の暮らしの様子を実際に見たことで、やっと同じ視点、同じフィールドに立てたと感じられたことであった。インタビュー時は、自分はまだ異なるフィールドにいる完全なよそ者でしかないと思っていたが、訪問を経て、少し野田村の人々に寄り添えたような気がした。オンラインでもインタビューは成立したし、実際にたくさんのお話を伺うことができた。でも、そこで聞いた話のより深いところやその語りが出てきた背景を理解する、あるいは、聞いた内容を自分の目でも確かめるということは、現地に行かないとできない。これらの点がフィールドワークにおいて現地を訪問することの意義ではないかと私は考えている。

また、これらの学びはオンラインフィールドワークという形であったからこそ得られたものだと言える。つまり、現地に行けなかったからこそ、これまでは当たり前に行っていた現地訪問の意義を改めて考えることができたのだ。いつか、受講生のみんなと野田村を訪れて、お世話になった方々に直接感謝の気持ちを伝えたい。

（人間科学研究科　臨床死生学・老年行動学　菊地亜華里　きくちあかり）

(12) 笑顔を見た時、距離が縮まり、繋がりを感じた

オンラインの利点は、遠くの人と簡単に繋がり会話が出来る点である。私たちの班は、コミュニティ・ラーニング実施前の打ち合わせを、何度かZoomを用いて実施した。お互いの空いている時間に好きな所から参加出来るため、非常に便利な方法であると考えていた。

しかし、オンラインインタビューでは、その手軽さが裏目に出ている様に感じた。離れていても簡単に繋がれるという手軽さ故に、初めてお会いするインタビュイーとの関係性構築の困難さや対話を深める上での限界を実感した。Zoomというツールを用いてしか繋がっていない危うさ、画面越しでしか話す事が出来ない物理的距離感や、インタビューを終えると画面にはもう相手がいない寂しさがあった。また、オンラインインタビューでは、質問者以外はパソコンで書記を務め、表情や相槌はどうしても伝わりにくい。一方、対面インタビューでは、空気感や時間を共有する事が出来、同じ空間にいる安心感や繋が

りを創出出来る。また、お互いの表情や相槌を直に感じる事により、より深い対話が出来る。

上記の様なオンラインの課題を実感した私たちは、2回目のインタビューでは、ただインタビューをするだけではなく、関係性を構築し対話の場を作りたいと考え、「くるびあじがする」(野田村の方言で「美味しい」という意味)パネルを作成した。パネルを用いて貫牛さんから頂いた野田村の物産品の感想を伝えた時、弐又みちさんは満面の笑みを見せてくれた。その笑顔を見た時、大阪と野田村という距離が縮まり、繋がりを創出できた様に感じた。

このようにオンラインで繋がりを創出した時、改めて現地訪問する意義を見出した。オンラインで創出される繋がりは、Zoomというツールを介すなど、何らかの仲介があっての繋がりである。しかし、現地に訪問するという事は、同じ空気を吸い、同じ気温、天気のもと過ごし、同じ土地の物を食べるなど、直接的な繋がりを創出できる。今回私は野田村に訪問する事が叶わなかった。それ故、現地訪問中の班の2人と電話をして、野田村の様子などを教えてもらった。しかし、野田村の気温、天気、食べた物の詳細や、テレビ電話で外の様子を見せてもらっても、野田村を直接実感する事は出来なかった。野田村に自分の足で踏み入れ、空気を感じ、波音を聞き、くるびあじがするご飯を食べて、初めて野田村を実感出来る。そして、同じ時や空間を野田村の方々と共有する事で、深い繋がりが創出でき、そこにこそ現地訪問の意義があると考えた。
(人間科学研究科　未来共生学　副島明日香　そえじまあすか)

(13)フィールドワークでは、オンラインと現地訪問が相互補完関係に

私の研究分野は基本的に実験動物を相手に実験室内で完結してしまうため、インタビューはおろかフィールドワークすら経験したことがないという状態で、今回のオンラインフィールドワークに臨むことになった。初めてのインタビューとなった小谷地勝さんの時には、正直どのようにインタビューを行えばいいのかわからないまま行なった。そして、沈黙の時間に耐えられず、同じようなことを繰り返し聞いてしまったりもした。直接お会いする形でのインタビューであれば、何気ない会話をしたり、あるいは沈黙の時間もある程度その場の空気でなんとかなったりしたのかもしれない。こうしたところがオンラインの難しさなのかもしれないと感じた。

弐又みちさんのインタビューはそうした反省を踏まえ、メンバーの名前や「く

るびあじがする」というフレーズを大きく印刷したものを用意したりするなどして、できる限り工夫した。オンラインでは表情が伝わりにくく、また、映像も限られた範囲しか映されていないため絵面が変わらないという難しさがあった。何かパッと見て伝わりやすいものや共感を伝えることができるもの、例えば、SNSでいうスタンプのような使い方ができるパネルみたいなものを用意しておくと、オンラインフィールドワークではいいのかもしれない。

実際に現地を訪問すると、オンラインフィールドワークで得た知識は残念ながら断片的なものであったことを実感した。現地では、荒海団が地域住民の中に根付いていると感じたし、震災による被害の重大さも痛感した。訪問後に改めてインタビューの記録を振り返ると、初めに聞いた時とは全然違うように感じたり、なるほどと腑に落ちたりするポイントがいくつもあった。

以上のように、やはりフィールドワークを行う上で、現地に行くことに勝ることはないと思う。その一方でオンラインがもつ可能性も感じた。今回私たちは初対面の状態でインタビューを行なった。このような状態では、相手の視点に立って物事を捉えることはとても難しく、また、関係構築も難しい。しかし、ある程度関係を築けている相手となら、オンラインでも色々とできることはあるのかもしれない。オンラインの最大の長所は、いつでもどこでもできるというところにある。現地に行くフィールドワークは時間もお金もかかるが、オンラインだと今までよりも頻繁に連絡をとることが可能になる。関係構築にオンラインを利用することは難しいが、例えば、近況報告に用いるなど、頻度という意味ではオンラインを利用することで今まで以上に密接なコミュニケーションをとることができるようになるだろう。将来的に、オンラインでのコミュニケーションにさらに工夫が加わることで、現地訪問と相互補完しながら、フィールドワークが行われていくようになるのではないかと思っている。

（人間科学研究科　行動生理学　濵田 理志　はまださとし）

3. おわりに

フィールドワークの意義は、人と人とのつながりの中で学ぶこと、そして離れていても現地に想いを馳せられるようになることであると思う。コミュニティ・ラーニング2020は、オンラインであってもその一端を経験する機会になり、たくさんの学びを得ることができた。これは大きな成果である。では、な

ぜオンラインであってもフィールドワークが実現できたのであろうか。

野田村のみなさんはこの10年間、村の復興に向けて、一人ひとりが想いをもち、できることを一生懸命に取り組んできた。だから、言葉だけではない気概のようなものが、2次元の画面越しであっても声や表情を通じて伝わってきた。また、大阪大学は野田村にサテライトを設置し、毎月セミナーを開いたり、村民有志のイベント放送活動を手伝ったりと、野田村の復興に、外部者として寄り添ってきた。そして、このコミュニティ・ラーニングという授業は、野田村のみなさんと大阪大学が、7年以上かけて共に創りあげてきた授業である。だからオンラインであっても、新型コロナウィルスに負けずに今年も実現できたのだ。

新型コロナウィルス感染症が終息し、学生たちと一緒に野田村を訪問する日が一日でも早く訪れることを願うばかりである。最後に、コミュニティ・ラーニングの実施にあたってご協力いただきましたチーム北リアス現地事務所長貫牛利一氏をはじめ野田村のみなさまに、心より感謝申し上げる。

写真３：コミュニティ・ラーニング 2020 受講生と教員